土浦発

未来への伝承 139

――縄文人の利用した植物繊維～カラムシ～

縄文人は、「編む」・「組む」という技に長けており、かごや敷物、縄や紐、編布などを作っていました。

近年、遺跡から出土したかごの素材や製作技法について研究が進められています。また出土例は少ないですが、縄や紐などの素材の再調査も行われています。縄や紐などは鳥浜貝塚（福井県）や東名遺跡（佐賀県）、小竹貝塚（富山県）などで出土例があり、現在150点ほど調査され、その素材植物がわかってきました。それらは、シダ類（リョウメンシダの葉柄など）が多く、他にツヅラフジの茎、ヤマブドウの樹皮、マタタビ属の茎、カバノキ属の樹皮、アサやカラムシなどイラクサ科の靭皮繊維、シナノキ属の樹皮、サクラ属の樹皮などに同定されています。シダ類や樹皮などが利用されていたことがわかってきたのはごく最近のことです。

また縄文時代の布の出土例はさらに限られますが、山王囲遺跡（宮城県）や荒屋敷遺跡（福島県）などで出土しています。縄文時代の布はタテ糸をヨコ糸に絡ませるいわゆる「もじり編み」による布で、「編み布」すなわち「編布」と呼んでいます。

今回は縄文人の利用した植物繊維の中で、「カラムシ」について取り上げます。

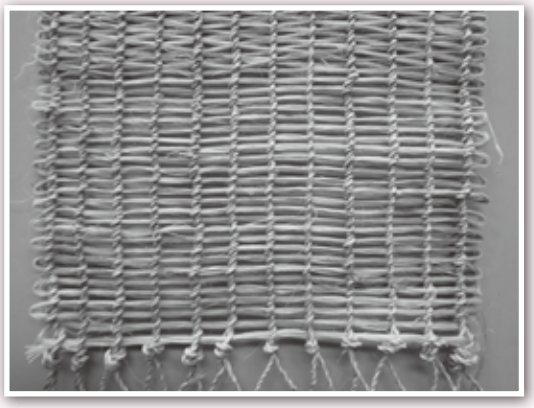
「カラムシ」はイラクサ科の多年生の草本植物で、高さ1メートル前後に成長し、日当たりの良い草地や道端などに自生します。上高津貝塚ふるさと歴史の広場でも4月から8月ごろまで見ることができます。4月に芽を出し、6月には繊維を採取できるまでに成長します。8月から9月に小さな黄緑色の花が咲きますが、繊維の採取は花が咲く前に行います。当館ではカラムシの繊維の採取から布を編む体験ができる講座を実施しています。

使用する部分はカラムシの茎で、靭皮繊維と言われる部分です。茎の外側の薄い皮を剥ぎ、そこからさらに表皮を剥ぎ取ります。これを「苧引き」と呼んでいます。その後よく乾燥させ、乾燥した繊維を細く長く裂き、手で撚りをかけて糸を作ります。縄文時代の編む道具はよくわかっていませんが、刻み目を入れた横木と脚、錘（コモヅチ）を使って編んでいきます。当講座ではコースターなどを作製する予定です。

現代では使われなくなった素材も多々ありますが、縄文時代には素材の性質を見極め、布やかごなどを作製していました。それらは現代をも超える完成度を有していました。そんな世界をぜひ体験講座で味わってみてください。

問 上高津貝塚ふるさと歴史の広場（☎826・7111）

▲広場のカラムシ（上：拡大）



▲講座で作製した編布